

元 氣 の 源 通 信

充実した人生を送るために心・技・体を磨き続ける

特定社労士・経営士 深川順次
福岡市博多区比恵町 11-7-701
TEL092-409-9257 FAX092-409-9258

(今月の言葉)「いい会社」にしよう

- ① 全社員を株主にしている会社
- ② うつくしいレストランのような食堂のある会社
- ③ 社員のために環境整備を行う会社

2014年7月号(第137号)

7月11日、中小企業大学校直方校の「経営トップセミナー I」で坂本光司先生(法政大学教授)の講座があるということで参加してきました。

坂本先生はこの間、実に7000社を回り、「いい会社」の発掘を行い、『日本でいちばん大切にしたい会社』(1~4)として著しています。

先生は、「いい会社」の条件を「大切にすべき人を大切にしている」会社として、次のように述べています。

まず、経営者がいちばん大切にしなければならないのは、「社員とその家族」であり、「仕入先や協力工場等で働く社外社員とその家族」。社員がとりわけ大切にしなければならないのは「現在顧客と未来顧客」。更に全社的に大切にしなければならないのは「地域住民とりわけ障がい者や高齢者などの社会的弱者」。以上の4人を大切にすれば5人目の「株主、出資者、支援者」の幸せは結果としてついてくる。

現在、「いい会社」を100の指標からまとめており、近々本として出版するということでした。

今回の講座でも冒頭、「いい会社」の事例として3社が取り上げられました。今回はその内容を紹介します。

「いい会社」にしよう

全社員を株主にしている会社

A社は神奈川の住宅リフォームの会社です。社員は45人。株主総会があるのでぜひ来てほしいという依頼があり参加したそうです。坂本先生はどの企業の株も一切持っていないし、これからも持つつもりはないということですが、依頼を受けたのは興味ある株主総会だったからとのこと。

全社員45人ですから、普通の中小企業では、株主といえば社長の家族や近親者でせいぜい5~6人というところでしょうか。ところがA社の総会には実に200人の株主が参加していました。株主の内訳は社員45人、お客様130人、その他取引先関連の方など。つまり全社員が株主であり、文字通り社員、お客様、取引先等に支えられた企業でした。

財務内容はすべてガラス張りです。お客さまはロコミで広がり、リピート客がほぼ100%。業績は好調で賞与を毎年5か月分支給しているということでした。

このA社のように社員を株主や出資者にして業績好調な会社が出てきています。例えばメガネ21や日本レーザーなどです。

日本レーザーは、日本電子(株)の子会社でしたが、MEBO(経営者と従業員が参加する会社買収)というかたちで独立した会社です。日本レーザーは「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞・中小企業長官賞や東京商工会議所による「勇気ある経営」大賞などを受賞しています。またグループ長(課長級)の3割を女性が占める等により経済産業省による「ダイバーシティ経営企業100選」にも選ばれています。日本レーザーは名実ともに「社員の会社」となり、躍進を続けています。

うつくしいレストランのような社員食堂がある会社

B社は中国にある社員数2000人の日系自動車部品メーカーです。坂本先生はトヨタ通商の部長から次のようなメールを受け取りました。

「中国の広東省にも人、とりわけ社員とその家族をトコトン大切にす経営を実践し、立派な業績を安定的に上げている会社があります。中国では近年多発しているストライキもほとんどなく、離職率もきわめて低い企業です。日本から派遣された杉山社長さんが、身を粉にして、社員とその家族をどこまでも大切にす経営を貫かれているからと思います。

立派な経営者です。機会があったらぜひ訪問して、社長さんたちをほめてあげてください・・・」

今年3月坂本先生一行は、その企業を訪問しました。朝の7時半、従業員が出社する時刻です。門前では7~8人が立って従業員に挨拶をして迎え入れています。その真ん中で挨拶していたのが杉山社長でした。毎朝の日課だそうです。

先生は大体2箇所を見れば本当に社員を大切にしているかどうか分かるといいます。社員食堂とトイレです。

社員食堂は最も日当たりのよいところにありました。しかも北京料理、広東料理、和食など8種類の料理を提供しています。「慣れ親しんだ料理を食べてほしい」という気持ちからです。

トイレは全てウォシュレット付です。お客様用や事務棟にはウォシュレットが配置されているところでも工場まで配置されているのはめずらしい、しかもここは中国です。

工場では立ちっぱなし仕事です。作業台の後ろ側が広く、多種多様な椅子が置いてありました。休憩室に行かなくてもすぐに休めるようにです。

社員のために環境整備を行う会社

C社はアメリカ南部インディアナ州にある従業員400人の日系鋳物製造会社です。

鋳物工場は粉塵が舞う文字通りの3K（きつい、きたない、きけん）職場です。これまでの経営陣は儲かっていないことを理由にして一切環境対策をしてくれませんでした。

新たに再建社長として単身派遣された加藤社長は、現場の管理職との昼食懇談、従業員との対話を進め、すぐさま天井には大型ファン、溶鉱炉近くにはスポットクーラーを設置し、各職場には冷水器も導入しました。

また、大変貧しい地域の従業員が多く、会社内では弁当を盗まれる事件が続出していました。そこで「休憩時間にサッと食べることができ、栄養のあるもの」としてバナナを無料提供することにしました。すぐさまなくなったので、人事部長には「持ち帰る人がいるのでやめたほうがよい」と反対されましたが「箱ごと置くように」と提案します。

次の日の夕方、食堂近くを通りがかると何人かがバナナをポケットに入れているのを目にします。「人事部長が行った通りか・・・」と裏切られた思いになりましたが、ふと外に目をやると駐車場に迎えに来ている車の中から子供が出てきてハグ、何かいいながらバナナを渡していました。加藤社長は、その睦まじい光景を見て、バナナを出してよかったと心から思ったといいます。

この光景をみた人事部長も「ミスター加藤の言っていることの意味がよく分かった。明日からりんごやオレンジを出してもいいか・・・」と言ってくれました。更に従業員が自分のところで採れたキュウリやトマトを食堂のテーブルの上に置くようになったのです。

C社は、以前は従業員の心は荒れ果て、毎日ケガも発生し、生産性も上がらず、赤字垂れ流しの状態でした。離職率も実に40%を超えていました。しかし、今や離職率は2%に激減、品質も生産性も向上し、利益体質に転換したのです。

3社の事例は「大切にすべきことを大切にす」それは、人の命であり、生活、そして幸せであることを物語っています。

参考文献：『日本でいちばん大切にしたい会社3』『日本でいちばん大切にしたい会社4』（坂本光司）